書評

蠟山政道編

『総選挙の実態』

川口　謙

一　蠟山教授を中心とする鶴飼・辻・川原・中村等の諸氏のグループは、かつて、昭和二四年の総選挙をめぐる実態調査をこころみられ、その成果を〝政治意識の解剖〟（朝日新聞社刊）と題して公表された。このおなじグループは、昭和二七年一〇月の総選挙にさいしても「前回の調査の経験をさらに深める決意をもつて」（二頁）実態調査を実施されたが、本書〝総選挙の実態〟は、この第二回目の調査のうんだ成果である。

敗戦によつて〝解放〟された日本の政治学界にとつて、この種の実態調査の継続と集積とが深い意義をもつものであることはいうまでもない。しかしこのことは同時に、日本の政治学界にとつていわば未開拓の分野に属するこの種の実態調査の困難さを物語るものである。さらに、この種の広汎な、綿密を要する、しかも人々の機微にふれる問題を丹念なインターヴィューを通じてたぐりだし、これを整理することのいかに大きな忍耐と努力とを要する作業であるかは、私の乏しい経験に徴しても察せられる。本書が、私どもの共有の財産として附け加えられたことに対して、調査を指導され、また実地に担当された諸氏に敬意を表したい。

今回の調査も前回と同様、都市と農村とを一カ所づつ調査区とし、都市としては東京都城東地区、農村としては東京都下の鶴川村が選ばれた。調査の方法もほぼ前回と同様であつて、立候補者、地方有力者、組合幹部、一般有権者などに面接してインティメイトな聴取り調査を行うと同時に、これと併行して、無作為抽出法によるアンケート調査を、都市・農村それぞれ約五五〇人ずつ、選挙直前と直後とに実施するという方式をとつている。

かくて、本書の構成は第一部都市と第二部農村との二部に分たれ、その章別は都市・農村ともにほぼ同じく、㈠調査区の社会構成と政治的背景、㈡選挙運動の組織と方法、㈢マス・コミュニケイションおよび公権力の影響、㈣選挙民の反応、という構成によつてまとめられている。しかし――これは本書の特色の一つだと思うが――、データを公式論にそつてまとめすぎることを努めてさけているようにみえる。つまり、調査によつて蒐集された数多くの諸数値や選挙民の生の言葉が、そのまま、編者によつて右の章別にしたがつて配列された形である。かくて、本書を精読しようとするものにとつて、各所から汲みとれるつきない興味は、本

書の到るところで、何気ない選挙民の言葉のはしばしに散見される鋭い問題提起である。と同時に、本書を通読して感ぜられる物足りなさは、それらの鋭い問題提起が、必らずしも充分に整理され展開されるに到つていないこと、つまり、実証の裏附けをこえた一般論への展開、公式論の適用が差し控えられている点であろう。そこに、この種の社会調査技術の量質両面の不充分さからくる実態調査の限界があるわけだし、殊に、実態調査の面で方法的技術的に経験の浅い日本の政治学界の悩みがあるわけであろう。しかしあえてその限界をこえた独断をさけようとしているこの調査取まとめの態度は健康だと思う。またそれは読者に対する親切な配慮であり、本書の資料的価値をたかめているものである。

しかし、資料の整理の仕方は決して充分とはいえまい。むしろ生のデータの提出にもつと徹底すべきであつた。

以下「　」は引用文、『　』は住民の言葉の引用。

したがつて、本書を読む人は、それぞれ、そのいだいている関心と、そのもつている方法とを、この報告資料によつて検証することもできようし、また、その理解を深めるために、この報告資料をそれぞれの興味と方法とにもとずいて編み上げてみることもできるであろう。こうした本書の性質からして、私は、この調査報告を私なりの興味と視点とにもとずいて編みなおしてみて、その理解を深めようと試みた。未熟ながら、以下、その結果と、その過程において感じた不満などをのべて、本書の紹介にかえさせていただきたいと思う。

なお、こうした私なりの視点にたつとき、本書に提起されている問題は、都市についても農村についてもあまり異ならないのではないかと思えた。また、私の個人的な興味に答えてくれる内容を都市の調査報告の方がより多く備えているように思えた（つまり、のちに指摘するような方法的な反省と視点の集中とが、都市の報告においてより意識的になされているという意味において）。よつて、以下の記述は、その焦点が主として第一部の都市の調査報告の方に注がれていることをあらかじめ御了承いただきたい。

二　序説によれば、この実態調査の狙いは、前回の調査の場合よりもややしぼられて「労働者または農民が、市民としてその意思を表明する場合に、他の一般市民といかに異なるか、また異ならないかをみることがその主たる目的であつた」（三頁）。つまり調査の焦点は「労働組合や農業協同組合などの社会組織が労働者または農民の投票に及ぼす影響と、他の一般市民と共通する組織または制度が及ぼす影響との比較研究」（三頁）といつた点に意識的にそそがれたようだ。いわば組織票のゆくえといつた点に関心が払われたのである。

このように、労働者・農民・一般市民が、それぞれの属して

る組織や制度とその交錯の中にあつて、その選挙行為にどのような影響を受けているか、ということに本調査の目的がおかれているとき、組織とか制度とかいわれているものが何であるかがまず問題になる。本書を通読したところでは、この組織や制度はきわめて広義に理解されているものと思われる。たとえば、「地域の住民は種々の生活組織をもつている。ある工員は工場で組合を、ある商店主は商店会を、ある人はPTAに、ある人は××講に、と種々雑多の組織が、あるいは重複し、あるいはその一つが強い掌握力をもつて存在している」(四二頁)。しかも「その人が家に帰ると、そこにはまた多くの場合、居住の丁目毎に作られた防犯協会あるいはその変型・発展としての自治会が与えられている」(四二頁)。つまり、本書がいう組織とか制度とかは、以下のようなものの一切を含むのである。(イ)家・夫婦・本家分家といつた親密な関係、(ロ)大企業や中小企業およびその企業相互間に結ばれる支配従属の関係といつた企業的・分業的関係、(ハ)労働組合の如き階級組織、(ニ)協同組合や同業組合といつた職能組織、(ホ)町内会・自治会・共同住宅街・もしくは地元といつた地域的な集団、(ヘ)青年・婦人団体から、はては(ト)ラジオ・新聞・演説などにおける聴衆・ファンといつたきわめてゆるい結合関係など(ファンを結合関係の中に含めることには問題もあろうが)そうして、個々の選挙民は、不可避的に、あるいは淡い、あるいは濃い、あるいは広大な、あるいは狭小な組織集団の交錯と不断の流動の網の目の中に位置しているわけで、調査の焦点も、選挙民個々をめぐるこうしたさまざまな社会関係のからまりあいに向つて、終始興味ぶかく注がれているのである。

このように、今回の調査において、前回にもまして意識的に組織や制度に注意が払われたということは、つまり、こうした社会諸関係の複雑に交錯する網の目として選挙民個々が存在するのだという事実認識、および、選挙民個々の政治意識の形成とその表明とが、この網の目としてあらわされた複雑な社会的位置によつて規制されているという予想↓仮説がその底にあつたことを示している。選挙行為の分析が、組織を媒介にして、労働者・農民・一般市民の間の比較研究という方法で企てられたということ自体が、それを裏書きするものであろう。つまり、特定の地区の上に無数に交錯する社会関係の中に占めるその社会的位置の共通性という側面から、労働者・農民・一般市民の三つが類型的に大別され、それぞれ、政治意識と社会的位置との相関関係の比較研究が試みられたのである。

三　さて、ここでまず問題にすべきは、地域の住民個々をめぐつて複雑に交錯する大小無数の組織や制度の性格の個別的吟味でなくてはなるまい。本報告も、勿論、それを怠つていない。ことに、

選挙との関連において〝街の組織〟と〝職場の組織〟とを重点的にとりあげ、この二つを中心に組織・制度の検討を進めているのは賢明だと思う。いうまでもなくこの二つの組織には、それに所属するものとして、前述した〝一般市民〟と〝労働者〟との二類型が対応している（第一部都市）に視点を集中するので〝農民〟およびその組織は除外する）。

〝街の組織〟とは、「自治会・防犯協会・同業組合等々で、これらの組織の有力者は、いわゆる街の顔役として相互に結ばれて、錯綜した『顔役の網』を街全体に拡げている。そして就職・金融・内職の斡旋・夫婦喧嘩の仲裁から水害対策・レクリエーション等の街の催し物に至るまで、さまざまの事業を通じて街の日常生活の一つの支柱をなしている」（一〇二頁）。また〝職場の組織〟とは中小企業の組合における「非政治性を説き、家族主義を強調する親睦会的なもの」から、大企業の組合における「ストを決行する戦闘的なものまで、さまざまの性格をもった労働組合で、賃上げ問題・共済事業・レクリエーションを通じて労働者の一部を組織し、さらにその一部は全国的な総同盟・総評・産別に結びついている」（一〇二頁）。

ところが、実は選挙における「これらの組織の影響力については、データに徴しても「組織成員の把握力からいっても、さして、過大に評価することはできない。」（一〇四頁）。たとえば〝街の組織〟については「自治会長だって本当は大して握っているわけではありませんよ。売り込みのために確実なような顔をしているだけで……金をもらった奴が動きまわるだけで、実際は大低一人できめますよ」（七〇頁）。「したがって『候補者は土地代表として有力者を握れば票がとれると考えているが、表面的に握っているようにみせかける売り込みのハッタリが多い』ともいわれるような状態」（七五頁）なのであり、〝職場の組織〟については、労働組合運動も「強力な時には全工場を根底からゆり動かす力を見せたが、内部的には自発性を欠く面は強く残っていて……組合の決定についても、強力な指令の形があれば従うが、自発的なもり上りをもってこれを支える場合が遺憾ながら少いのが実状」（六三頁）なのである。そうしてこのような〝街の組織〟や〝職場の組織〟の弱さは、「一つには組合の職制化と顔役の横暴に対する反撥があり、二つには個人の生活領域はこれらの組織の複合体として出来上っており、従って職制や顔役や組合幹部だけが選挙民の政治態度を支配しているのではない。三つには組織の下にありながら、組織の動きにテンデ影響を受けないものがあるからだ」（一〇三、四頁）と判断されている。

つまり、組織や制度を、たんにそれぞれを個別にその平面をみただけではその組織の性格――成員の把握の仕方・組織に対する成員の従属の程度――はわからないのである。それは、一方、そ

の組織に所属する成員を、それ以外の諸組織集団にも同時に分属している、いわば諸社会関係の交点において、その社会的位置においてとらえなくてはならないし、他方、その組織自体が、これを取り囲んでいる上部組織・協同組織・対抗組織との関連における社会的位置において把えられなくてはならない。いわばこの内外両側面からの相互作用の場として、当該組織・制度自体の性格——成員の把握の仕方——は明らかとなるのである。

四　かくてまず、〝街の組織〟と〝職場の組織〟との性格——成員の把握の仕方→選挙に際して発揮しうる統制的役割の程度——が、その所属する成員の社会的位置の側面から検討されることになる。

本報告書はその各所において、この両組織の成員を、その社会関係的な位置に即しいろいろに描写している。すなわち、〝街の組織〟の成員については商人・労働者とその家族・サラリーマン集団住宅の住人などが注目され、〝職場の組織〟については、一般労働者や町工場の古顔の老労働者、それに町工場主などの社会的性格が問題にされている。

その結果、まず住民一般について「旧くからの地元民が戦争以来少なくなったこと、人口の流動が著るしいこと」などが基礎的事実として指摘される。そうして、たとえば商人や中小企業者については、その「階層的な稀薄な連帯性、むしろそれぞれ孤立していながら、しかも同類性があることを示すものであり、すなわち商人・中小企業者はいわばある意味における『国民的』意識にあるといえよう」（一一九頁）。「ここから国家権力の中立性とか自由競争とかの幻想をもち、現状の変化をきらって日常経営の維持に夢中である商人・中小企業者」（一一〇頁）がそだつ。「したがって『商人は時の天下に従うもの』」（一一〇頁）との評価が下される。また労働者については「一代限りの若い出稼労働者」（三三頁）「農民的労働者ドンビシャリ」（三三頁）もしくは、「近所のおかみさんや親がかりの次・三男の家計補助的な性格が強い」（五五頁）職工としてとらえられ、町工場の古顔の老労働者は「自分自身年輩になれば自治会役員などにも進出できるし」、「地域団体の中にしっかり組み込まれた職人的労働者とその家族」（六五頁）として把握されている。また、サラリーマンについては、バラバラにそれぞれの勤務先に分属することによって地区的共同性を欠き、地区的側面において社会的共同行動への能動性をもたない点が指摘される。

ではつぎに、これらの〝街の組織〟や〝職場の組織〟を外側から包んでいる諸関係としてはどんなものが認められるか。

本書が指摘しているこれらの関係の中の主なものを例示すれば、(イ)『中小企業の金融難につけこんだ金融ファッショは苦々し

い次第です。中小企業となると金を借りればどうしても従わなければならなくなります』（七六頁）とか、『東京都の交通局、建設局の仕事は野口に頼まなければ駄目で、水道局の工事は都議のNを通さなければうまくゆかない』（七七頁）と住民に語らせているような金融や利権の系列。㈡『中小企業は大企業の下請として従属しながら、不況に際しても安全弁として温存せしめられているので、その上部企業からのヒモがついてくることは不可避である』（七二頁）。『大メーカーからの仕事のおりる径路をみると、大抵、この辺の町工場にくるまでに最少二つ位の仲介者が入っており……やはり発注者・仲介者に対してあらゆる手段をつくして取入らざるをえない』（七二頁）と中小企業者に語らせているような資本系統・顧客関係の系列。あるいは、㈠『総評が〝総資本との対決〟をとなえ、産別が〝自由・平和・独立〟を強調しても』（五八頁）、『われわれ小さな組合にはついてゆけない無理な運動方針だ』（五七頁）と小労組のある幹部を困惑させているような労働組合の全国的連合組織からの指導・指令の系列。また、さらにその外部には、㈢価格関係にあらわれる国際的規模につながる経済的変動や、また、㈣ラヂオ・新聞などのマス・コミュニケーションの潮流が、地域の住民全体を外から包み込んでくるものとして指摘されている。

五　以上によって、選挙の最重要ルートたる〝街の組織〟と〝職場組織〟とが内と外との二つの側面の交錯する場として存在していることがわかった。よってここでもう一度、この二つの組織を内外両側面が働きかけている場面としてみなおしてみることが必要になる。詳細は本文によっていただきたいが、こうした場面についての本報告書の描写は非常に多岐に亘っており、また機敏をうがっていて誠に興味深い。

まず〝街の組織〟をみよう。街の組織＝自治会は、もともと「戦後の混乱期に、役所の末端の組織がないと下部へ伝達ができぬという理由で組織された」（四二頁）ものであって、「それは明らかに『役所の方の希望で』出来た経緯からも、当然官僚機構の末端としての性格を備えている」（六九頁）。他方、「不景気と下請製品の値下りと金融難との三重の犠牲を強いられている町工場主」（三二頁）や小商人たちは、小所有者としての自由の温存を願うという面では保守的でありつつ、その限りでのアクティーヴな政治の関与に期待せざるをえない。『小さな商売人たちは、警察・保健所・都庁・税務署など、有力者を介してわたりをつけないとやってゆけない』（六八～九頁）し、「商店街における金融緩和対策、集団住宅街における内職の周旋、商店とくに飲食店にみられる税金軽減など、街の人の日常の利害を通じて、かれらの日常生活の一支柱」（一一七頁）となっている街の有力者の登場を

促さざるをえない。「上からの支配の滲透と、下からの連帯的意識とによる似而非自発性とを媒介する自治会組織」（七〇頁）はこうしてできあがる。「街の有力者は確かに仲介者の機能を果している。一方では街の日常生活の支柱となり、他方では警察署・税務署・区議・都議・代議士との関係をもっている」（一二四頁）。その限り、街の住人たちの「経済窮迫の激化は……かえって益々政治的無関心に傾斜させ、また、ある場合には個人的庇護関係を強める結果にさえなる」（一二七頁）。しかも注意すべきは、この〝街の組織〟は自己を存続させてゆくために「選挙民の日常の要求を政治的に表現することを助けるよりもむしろ（その一切を自己に引請けて―引用者）それを政治的にならぬように処理することによって、既存の体制を維持する機能をもっている」（一二五頁）点である。かくて「保守政党の『地盤』の組織はこういう街の有力者網」として成立するのである。本報告書に表示されている保守政党の有力者系統の詳細な一覧表（表四六）は、見事にその事実を立証している、貴重な資料というべきであろう。

ではつぎに〝職場の組織〟はどうなっているか。戦後、「占領軍の労働組合育成策にのってどっと拡大した」（六三頁）労働運動は、レッドパージ以降「危きに近よらぬ意識」を醸成して、「労働者の政治活動をすべて事実上禁止したに等しい効果を生み」（六〇頁）、著るしく萎縮してしまったという。この目まぐるしい盛衰にこそ〝職場の組織〟の性格がそのまま端的に示されているのではないか。つまり、外からおしよせてくる嵐に表面は激しく波立ちながら、その波の下には動かないよどみが残されるといつた労働組合の内部構造が想像できるのである。そこには例えばつぎのような事情が考えられよう。すなわち、労働者の構成が、㈠その大半を占めるところの浮動的な「一代限りの若い出稼労働者」、「農民的労働者ドンビシャリ」もしくは「家計補助的な親がかりの二、三男やおかみさんたち」と、㈡少数の地元生えぬきの定着的な労働者、との二つの層から成っているという事情である。労働組合の全国連合体からの急迫的な指令がこうした構造の上におりてくるとき、工場経営が景気上昇の波に乗って順調ならば、古株の政治力のある組合幹部は、一部の政治意識の高い若手幹部らと共に、活潑な、もしくは勝手な、しかも労働者の大半の受動的・彌次馬的な支持をえた組合活動を展開する。しかし、一たびレッドパージが吹きすさみ、景気が沈滞して町工場の経営が危くなると、地元生えぬきの古株の労働者たちは、生活の不安が最も直接的で深刻なだけに、かえって経営者の側に立って経営の維持に協力し、特権労働者と化して組合を「職制や組合幹部のボス的な支配の道具」（一二八頁）として御用組合化してしまう。労働組合の全国連合組織からの指令もここでチェックされざるをえない。「労働組合が保守党支持を決議した実例」（六八頁）も

ありうるわけだ。この報告書ではこうしたシェーマが画かれているわけではないが、報告書の各所にあらわれている内外の事情とその交錯とは、〝職場の組織〟の性格について、たとえばこうした推察を可能にするように思う。この点、この報告書の分析において、組合組織の有無やその上級組織との関係形式といった平面では珍らしい資料の掲示や興味深い説明がなされているのに、それと組合内部の構造やその成員の性格との関連といった立体面になると、個別的・並列的に描かれるきらいがあって、それら相互のからみ合いが充分に取扱われていないのはやや物足りない。

六さて以上のように〝街の組織〟では、住民の社会生活の不安定性が、その庇護者として街の有力者組織の系列をいよいよ不可欠なものとして浮び上らせ、〝職場の組織〟では、職場の狭さと労働者の浮動性とが、組合運動の目まぐるしい盛衰や、最近における御用組合化を生んでいるとき、その底に、こうした体制を変えてゆこうとする社会的な動きはうずいていないのであろうか。

本報告書は各所において、この新しい動きのうずきを指摘している。「未だ組織されて政治的に高められていないとはいえ、平和と豊かな生活を求める素朴な要求は大きく滲透しつつあるし、そこから現在の政治に対する判断を、頭脳によってではないにしても肉体をもって得つつある」(五三頁)。「夫が社会党支持ならば妻も同じという例が多いが、ギリギリの生活におしつけられた労働者の妻という生活感覚から直感的な選択が行われているのである」(六六頁)。このように「かれらが日常生活の利害に鋭敏であることは、地域であれ、職場であれ、かれらが庇護を求める有力者を、かれらの利害によって判断し選択するに至る可能性があることである。……こういった小リーダー選択の主体性を保持する人々にあっては、よし彼らが国家大の、はたまた世界大の政治に無関心であり、その結果無知であろうとも、そのことは第二義的な意味しかもたない程に、小リーダー選択行為の政治的意味は重要であるといえよう」(一〇一頁。傍点はいずれも引用者)。こうなってくると、「選挙運動をする側にとってみても、従来のような安定した地盤の上に安んずることはできず、ずい分無理な選挙運動によってそれを補強することに努めなくてはならない」(七五頁)。「こうして巧妙な作戦が行われているが……金の力によってこれを補強しようとする動きも、必らずしも成果を挙げているとはいえない」(八二頁)のである(なお、この点については、内山政照稿「農民の政治意識の貧困を訴えるまえに」『富民』一九五五・四を参照)。

こうした社会の底に潜在しているうずきは、なぜに社会的な動きとして実現され、政治的にまで高められ、投票の帰趨にまで影響を及ぼすに至らないのか。これはどうすれば可能になるのか。

こうした点についてこの報告書は、主として、革新政党および労働組合の全国組織の活動の不充分さにその責を帰し、またその啓蒙活動に期待している。「とにかく、選挙民の素朴な断片的諸欲求とその政治的態度との間には、尨大な非政治的膠質が介在している。……〔しかも〕各政党の綱領のあいまいさが、投票を決するかれらの頭を一層困惑させる。本来なら政党が選挙民の生活関心にまでその綱領を引き下げるか、それとも両者を結びつける啓蒙活動につとめるべきであるが、実際は決してそうではない」（一〇一頁）「選挙は大衆が政治的に高められ大衆運動が組織されるための一つの重要な場なのだが」（五三頁）「この点、社会主義政党の開拓すべき第一の手がかりが等閑に附せられている」（一一四頁）。

以上は革新政党進出のための一つの戦略拠点の指摘であり、一つの処方箋である。その限りにおいてこの指摘は誤っていない。しかし、従来とても革新政党の側にこうした認識がなかったわけではあるまい。問題はむしろ、その認識がなぜ効果のある実践にまで至りえないのかというところにこそあるのではなかろうか。革新政党による外からの働きかけも、勿論新らしい動きを育てるための一つの重要な契機にはなろう。しかし、社会主義的「関心は、単なる啓蒙や特定指導者の強引な拍車によっては決してもたらされうるものではない。……それを生むものは住民の社会的生活環境にこそ求められねばならぬ」（二六頁）。否、たんなる生活環境＝貧困はかえって旧い体制の強化に向って作用する場合さえあること前述の通りだ。とすれば、旧い体制を変えてゆく運動の原因は、やはり、その旧い体制その自体の中から全構造的に把握されなくてはならないのではないか。

七　どうも報告書の内容を私の個人的な興味にひきつけすぎた結果、客観的に濃くあらわれている組織や構造の面ばかりに視点がかたよってしまったようだ。しかし本報告書が各所で触れているように、こうした社会構造と選挙行為とを関連させて理解するためには、さらにつぎのような点に注意が向けられなくてはならないのであろう。すなわち、投票行為というものが、複雑な社会関係、その交点としての選挙民の社会的位置によって規制されるものだということに誤りはないとしても、それが、無数の社会関係の中のどのきづなによって最も強く影響をうけるかは、決して単純な問題ではないという点である。

投票行為と社会構造との相関々係を選挙の種類別に考えてみてもこの問題の一つの側面をみてとることができるであろう。すなわち、町内会や部落の役員選挙、区会や市町村会議員の選挙、市区町村長の選挙、都や県の議員の選挙、それに衆参両院議員の選挙等々、それぞれ候補者と選挙民との社会的距離の遠近により、

選挙民の投票行為を規制する社会関係にさまざまなズレのあることは想像に難くない。これを投票率という面でみても、町内会役員や町村会議員のような地域的に身近かな選挙の投票率は概して高く、衆議院議員や殊に参議院全国区議員のような地域に縁遠い議員の投票率は低下するという現象が一般的に認められる。（こうした傾向は、居住地域の地縁関係が社会的距離と密接に関連している農民や街の商人において殊に強くあらわれ、地縁関係と社会的距離との関連が薄いサラリーマンや都市労働者においてやや弱くあらわれるといつた点、問題は複雑だがいまはふれない）。これはおそらく地域の組織である〝街の組織〟の拘束力は、町村会議員や町内会役員のような狭いグループの選挙において強く発揮され、国会議員のような広い範囲の選挙になると相対的に弱められるということを示すものであろう。そうしてそれは反面、国会議員選挙が〝街の組織〟によつ拘束されるところ少なければ少いだけ、それ以外の社会関係がこれを規制するものとしてその意味を強めてくるということに外ならない。しかもこの〝街の組織〟から相対的に解放されている自由な票を〝職場の組織〟が充分に捉えないとすれば、マス・コミュニケーションの受け手や演説会の聴衆といつた一時的・感情的な淡い結合関係が投票行為にそれだけより強く影響力を及ぼしうるということになろう。

殊に投票行為が物理的には極めて単純な行為であるにすぎず、しかも国会議員選挙などのように殆んど完全に選挙の秘密が保たれうるということになれば（村会議員選挙などでは秘密無記名でも大抵わかつてしまうといわれるが……）、選挙民は、一面、一切の社会関係の拘束からそれだけ自由になれると同時に、半面それだけ、たやすく別種の社会関係例えば（マスコミュニケーション）の支配に、一時的・気分的に屈服してしまうということにもなるわけであろう。勿論、「マス・コミュニケーションの影響は間接的であつて、独立的・主体的勢力として作用するものではなく、他の諸要因とからみ合いながら複合的な形で作用するもの」（九五頁）であり、その影響力→反応は、受け手の側の姿勢＝社会的位置によつて根本的には規制されるものであろう。しかしこうした客観的には決して単純であつてならない筈のもの（選挙＝政治意思の表明）を、主観的には極めて単純な手軽な行為（投票）を通じて集約的に表現せしめようと期待するとろに選挙制度自体がもつている悩みはやはり残るであろう。こうした点、私自身ほとんど考え及んでいないのだが、本調査においても方法的に更に検討すべき点がありはしないかと思う。

八　すでに予定の紙数をはるかに越えてしまつたが、最後にやや視点を変えて、調査票の分析について感じた点若干を述べて結びとしたい。

はじめに触れておいたように、投票行為の分析が、組織を中心として、労働者・農民・一般市民の間の比較研究において企てられたということ自体、とりもなおさず、その地域を複雑におおつている無数の諸組織の中に占める社会的位置を労働者・農民・一般市民に大別して、それと政治意識との相関々係を究明しようとしたことにほかならない。しかし、こうした調査の狙いにかんがみて、今回の調査に用いられた方法が果して充分に妥当であつたか否かには若干の疑問がある。そもそも今回の調査の狙いは、輿論調査などのように、一つの共通の平面に還元された共通の単位にもとづいて、統計学的・機械的に標本を抽出し、その結論を、その共通の平面に関する限りにおいて拡大し普遍化させることにあつたのではあるまい。むしろ力点は、労働者・農民・一般市民などの政治意思表明のプロセスと内容とを、諸々の組織・制度の交錯する社会の構造との関連において立体的に理解しようとするにあつたのであろう。つまり、全体の平均値が問題であるよりも、選挙民の社会的位置と政治意識との間のメカニズムの究明が問題であつたのであろう。そうだとすれば、城東地区もしくは鶴川村の全域からランダムに五〇〇人を抽出するよりも、むしろ、限られた狭い地域もしくは団体をインティメイトに社会構造との関連において、いわばケース・スタディーの方法によつて実施した方が妥当であつたのではないかと思われる。

右の観点に立つとき、調査票の集計方法に対しても疑問が生じてくる。（実際問題として調査対象が量的に僅少である場合、ある程度以上の立ち入つた分析は統計値としての意味をなさなくなるという危険があろう。この点、実情にうといので希望意見として御了承いただきたい。）まず労働者と一般市民（都市の場合）、もしくは農民と一般市民（農村の場合）とに分別し、更に進んで労働者を組合加入と非加入とに分け、また農民を自小作別にわけてそれぞれ政治意識との相関度を求めているのは、問題意識を充分にもつて分析を進めていることの証左ではある。しかし紙数の制約があつたため、分析がこれだけに留まつているのはいかにも物足らない。たとえば労働者と一般市民、もしくは農民と一般市民との分類がやや唐突に出てくるが、その前提となるべきそれぞれの社会的性格が明らかになつていない。組合への加入・非加入、農民の自小作別についても同様、いかなる視角において、加入・非加入、自作・小作が問題にされ区別されたのかが必らずしも明らかでない。勿論、都市の部・農村の部とも、それぞれその前半において、調査地区の社会構造がかなり詳細に概観されている。しかしこの概観とその労働者・農民・一般市民その他の分別とが、充分に結び合わされて論ぜられていない。この点、さきにも述べたように、ケース・スタディーの方法によつて、労働者・農民・一般市民や、さらにそれぞれの細分類を、個別にその社会

的位置においてとらえ、その位置に即して個々に政治意識を測定してゆくというやり方が望ましかったと思う。一例を組合加入者にとってみよう。勿論組合のもつ拘束力を、組合の決議にしたがつて行動した人数の割合であらわすことにも、意義はある。しかし更にこれを、組合の決議にしたがつたものとしたがわなかつたものとについて、それぞれその理由を各自の社会的位置（土着の労働者か出稼労働者か、職長か臨時工か、など）との関連においてさぐつてゆくなら、一層興味深い結果がえられたであろう（神谷慶治著『農村社会の変転』農業総合研究所刊は、こうした点に関してユニークな方法を用いている）。

政治意識を測定する場合の質問項目の選定にも問題があると思う。項目が同質的・羅列的にすぎはしないか。もつと質問項目を質的に変化させてその反応の相異をみるべきではないか。たとえば、住民に身近かな問題から、順次、国家的・世界的な問題へと課題を移動させながらその反応の変化をみるとか、あるいは、個別具体的な素朴な、あるいは情緒的な問題から、順次、一般的観念的な理性的問題へと移動させながら、その反応の変化をみると か。そうすれば怖らく、選挙民は、ある問題については明瞭な確固たる意欲的な回答を示し、ある問題については「わからない」か、せいぜいなまはんかな聴きかじりの知識で出まかせな答えをするであろう。

ある保守系の候補者は『再軍備のことをいうときには気をつけないと危い。とくに婦人層の気持をつかむことが大切だ』（七四頁）と語つているが、選挙民の心の奥底にあつて容易に動揺することのない素朴な感情と断呼たる主張とは、意外に知識程度の低い階層において血肉と化して根を張つているのかもしれない。このような「頭脳によつてではなく肉体をもつて」（五三頁）政治を判断し批判している人々というものは、えてして質問項目の「わからない」グループに一括して放りこまれてしまいがちな人々なのだ。こうした、質問項目のふるいの目から落ちがちな「わからない」グループの人々の素朴な肉体の主張をそのありのままの姿ですくい上げる工夫をすること、これは質問項目の選定にあたつてきわめて重要なことであろう。

右のように、一方、被質問者を社会的位置においてとらえて分別し、他方、質問項目を質的にいくつかに分類して、この両者をからみ合わせてみるとき、おそらくそこに幾通りものモードを検出することができるであろう。こうした分析は、政治意識を社会の構造との相関関係において測定しようとするこの調査の目的に照しても、必要なことであろう（内山政照稿「農民とラジオ」『農業総合研究』九巻三号は、この問題について示唆するところが多い）。